



STORY
 神崎(野村一瑛)は何か思い詰めた表情で、街へ出かける。タクシィが捕まらず、背中を丸め道端に座り込んでいると車道越しにひたたくり現場を目撃。一心不乱に走り出した神崎は、ひたたくりをしていた山本(河野宏紀)に声をかけ、100万円を渡す代わりにある場所へ送ってほしいと依頼する。山本は不信に思いつつも渋々承諾し、二人の奇妙なドライブが始まった。気まずく重い空気が漂う中、孤独な二人が共に過ごす歪な時間。この旅路の行きつく先は――。

PFFアワード2022
 グランプリ受賞

j005311

j005311.com
 @J005311_0422

来場者
 プレゼント!
 全2種

たらちねジョンさん 描きおろし
 “オリジナルステッカー”
 プレゼント
 ※ランダム配布 ※なくなり次第終了

渋谷Bunkamura前交差点左折

ユーロスペース
 EUROSPACE

tel.03-3461-0211
 www.eurospace.co.jp

4月22日(土)より全国順次公開
 全国共通特別鑑賞券1,500円(税込)発売中!

ユーロスペース 限定! 29歳以下割引実施! 一般1,800円の処、29歳以下1,400円 ※その他料金は劇場でお問い合わせください。
 横浜シネマリン ※割引チケットをご購入の方は、ご入場時に年齢が確認できるものをご提示ください。

公開劇場(各劇場の公開日は公式HPまで)	群馬	長野	愛知	京都	大阪	兵庫	広島	広島	福岡	大分	熊本	沖縄
青森 シネマデイクト 017-722-2068	シネマークたかさき 027-325-1744	松本CINEMAセレクト 0263-98-4928	シネマスコーレ 052-452-6036	京都シネマ 075-353-4723	シネ・ヌーヴォ 06-6582-1416	元町映画館 078-366-2636	横川シネマ 082-231-1001	福山駅前シネマモード 084-923-6800	KBCシネマ 092-751-4268	シネマ5 097-536-4512	Denkikan 096-352-2121	桜坂劇場 098-860-9555
宮城 フォーラム仙台 022-728-7866												
山形 フォーラム山形 023-632-3220												
神奈川 横浜シネマリン 045-341-3180												
神奈川 あつぎのえいがかんkiki 046-240-0600												

野村一瑛、河野宏紀
 監督・脚本・編集：河野宏紀
 撮影：さのひかる 録音：榊 祐人 整音：榊 祐人、河野宏紀 衣装：河野宏紀、野村一瑛
 撮影協力：ROCKY、和田裕子、谷口巴恵 英語字幕：藤山歩美
 字幕チェック：Janelle Bowditch 英語字幕データ制作：廣田孝
 配給：太秦 ©2022『J005311』製作委員会(キングレコード、PFF)
 【2022年/日本/カラー/DCP/90分】 j005311.com

人間、もがいて苦しんで、
 やつと一筋の光が見える。
 この世は絶望だけではない。
 オダギリジョー「俳優」



この映画を撮っている数日間だけが、この作品の制作者たちにとって「生きている」と感じられる時間だったのではないか。そう思わせてくれる映画だった。

色のないアメリカンニューシネマであり、歌のないヌーヴェルバーグのようでもあるが、

そこに描かれているものが絶望でないことにこそ、この映画の独創性があって特筆すべきだと感じた。実在感溢れるこの二人の未来に光があることを祈りたい。

中川龍太郎 [映画監督、脚本家]
——『わたしは光をにぎっている』、
『走れ、絶望に追い付かれない速さで』

冒頭数分で「良い映画だ」と感じる。長い菌磨き、きちんとかけ直されるタオル。上下セットのパジャマに、雨戸を開ける朝。全ての描写に意味があるのだと分かる。そしてその主人公と思われる男には違和感のある電話の受け答え。これは何かあるぞ、とこれから続く物語に期待してしまう。生きた、生きてきた人間の偶然の出会いが

惑星衝突に匹敵する奇跡
であると理解し、心がうち震える。そういう映画でした。

たらちねジョン [漫画家]
——『海が走るエンドロール』

「それでも生きる」と誰かに腕を掴んでほしいとき、きっとこの映画は灯台になる。

冬の冷たさへ震えることもできない男たちが命を燃やして宿した“本当”は、絶対の光を放って私たちの心を貫いてみせる。二人の目に互いが映っているということがこれほどまでに切実で真実である映画が存在するなら、生きていくことを信じてみてほしいと思えた。

工藤梨穂 [映画監督]
——『裸足で鳴らしてみせろ』、『オーファンズ・ブルース』

これはフィクションでありドキュメントだ。

主演の二人が纏う本物の息苦しき、行き場のなさに、何度も心をかき乱された。クライマックスに訪れる、とある強烈なショット。このショットは一生忘れられないと思う。

上田慎一郎 [映画監督]
——『カメラを止めるな』

野村くんと初めて出会った時彼の尋常ではないストイックさと、それに相反する優しい眼差し、静かに燃える青い炎のようなエネルギーに圧倒されました。そしてそれは確かにここに存在していました。彼らは確かにここにいました。孤独に手を差し伸べてくれました。息をすることも忘れ、新たに自分の呼吸を感じた時、

ああ生きているのだと、物凄い映画体験をしました。本当に素晴らしかったです。

趣里 [女優]

野村一瑛という役者を僕は知っている。過ぎた時間はほんのわずかだが、時間の多少に関係なく知っていると言い切れる。なぜなら、彼の「俺はここにいる」という悲痛なまでの叫びが強烈だったからだ。映画はダルゲンヌ兄弟を彷彿とさせるが、おそらく野野監督からすれば、そんなことはどうでもいいたろう。不器用で世間からつまはじきされた人間を、野村を

決して見捨てないという強い覚悟と執念

市井昌秀 [映画監督]
——『犬も食わねどチャーリーは笑う』

そうか、ここに至らせるための長い長い90分だったのか、と納得し、若い主人公二人の、ぬかるんだ雪道のような寂しさを味わいました。普通ならば対話や台詞が救うはずの場面で、それらが全く役に立たないことをつきつけられるのも新鮮でした。

西川美和 [映画監督]
——『永い言い訳』、『すばらしき世界』

二人の河野宏紀が闘っている——。存在の承認と愛を求めて叫んでいる。社会から溢れ落ちた者たちの声を代弁するかのように。

初監督が故に不器用に、しかし鋭く、濃く、熱く、彼だけのセンスが、「ここにいるんだ」と、光を放っている——。

春本雄二郎 [映画監督・脚本家]
——『由宇子の天秤』

この作品を生まないと次に進めないという作品が監督にはあると思う。『J005311』こそが、そんな魂の映画だった。人間に絶対的に寄り添うという優しさが溢れており、あるカットでパンした瞬間、私はこの世界に生きてよかったと思った。光を失った二つの星が奇跡と言われる確率で衝突し、再び光を放った。野野監督と主演の野村一瑛の出会いが生んだ奇跡のような

“優しさで打ち負かす映画”。

三島有紀子 [映画監督]
——『幼な子われらに生まれ』、『Red』

抑制の効いた演出と演技の中に彼らの俳優としての気骨を感じました。凍えるような寒さをくぐった人は、人の持つニュアンスに鋭敏で優しい。冬空の下で、ひとつの、確かな温かさをもらいました。

加瀬亮 [俳優]

この作品には嫉妬しかない。

主人公ふたりの心の欠損が、互いに享受されたとき、リハを重ねたであろうが、これは奇跡だと想った。決め科白もなく、身体表現があまりに美しく、監督の視座に感銘しかなかった。なによりも俳優が素晴らしい。

傑作です。

阪本順治 [映画監督]
——『冬薔薇』、『せかいのおきく』

映画を命がけで撮っていた、映画に人生の全てを捧げた青山真治の横にいた者として、映画とは“マジ”、つまり本気を感じられる作品が心に響くと思っている。この映画で長回しに挑戦し、音楽にも頼らず、

“一生懸命つくる”という“マジ”

を見せてくれてありがとうございます。

とよた真帆 [俳優]

カメラ前に立ちながら、その人物として生きる。自身もそうありたいと願いながらお芝居に向き合っているのですが、今作のお二人はそう言う「生きた人」にしか見えませんでした。

東出昌大 [俳優]

人の心を見つめているような映画でした。肩書き羅列のこの時代に逆光している。引き算の表現が嘘がなく、とても美しかったです。僕もまた一つ勉強になりました。

吉村界人 [俳優]